

CASE 15

長野県飯田市、そして現地のNPO法人の方々と産官学の連携を取りながら、『飯田市の地域活性化』をテーマにさまざまな研究を行いました。その結果、飯田市には農業が大きく発展するポテンシャルがあることが判明。学生たちは飯田市長に『飯田市における農業ビジネス』と題して、さまざまな企画を提案しました。

—— 山本悠貴／甲斐拓人（商学部 3年）
Yuki Yamamoto/Takuo Kai



農業にマーケティング発想を

まず、飯田市の現状を調査

プロジェクトの舞台となったのは、長野県南部にある都市・飯田市です。人口10万人を超える長野第4の都市で、伝統芸能の多さから南信州の小京都と呼ばれています。

『飯田市の地域活性化』をテーマに、学生たちは市職員の方々、NPO法人の方々と連携を取りながら活動を行うことになりました。まず、学生たちは実際に飯田市へ出かけ、現地の魅力や抱えている問題を肌で感じることに努めました。

飯田市の魅力は、人形劇などの伝統芸能やリンゴ並木に象徴される豊かな自然やおいしい農産物があること、一方で問題点としては、若者の都会への流出や人手不足による耕作放棄地の増加などが、調査によってわかりました。

学生たちは、これらの現状をもとに地場産業を見つめなおし、地域活性化の方向性を模索した結果、『飯田市における農業ビジネス』を提案することになりました。『飯田市は、まだまだ農業が発展する可能性を秘めている』と実感したからです。また、これを実現するためには、飯田市の農業にマーケティング発想を取り入れることが必要だと考えました。

既成概念をぶち壊す

さらに学生たちは、「農業法人班」「PR班」「流通班」と3つのグループに分かれて研究を行いました。関係者の方々と意見交換を重ねながら企画の作り込みを進め、その後、各グループの研究を一つにまとめて、飯田市役所にて牧野市長、飯田市民や就農者の方々の前でプレゼンテーションを行いました。

この発表では、まず飯田市の農業の実情を解説。現状の農業形態である『家族運営での農産物生産』から、今後は『法人経営による農業ビジネス』への移行の必要性を提案しました。

切り口は、次の3つ。

- 1 ▼ 法人組織をつくって経営
- 2 ▼ マーケティング発想による経営
- 3 ▼ ビジネス領域の拡大

こうした提案を飯田市で実践することの正当性を、市の農業関連データなどで示しながら、豊かな自然を活用した事業例を提案しました。

例えば、農産物の出荷先である飲食店に対して新メニューを提案し、それに必要な食材を提供するというコンサルティング活動。消費者と

生産者がつながる場をつくるために、観光ビジネスを立ち上げる、などがあります。

これらは、「農業Ⅱ農産物生産」という既成概念にとらわれない、農業をもっと広く解釈しようという提案なのです。

農業法人の立ち上げ

プロジェクトに参加した学生からは、「生まれた町でも育った街でもない飯田市に、どんな親しみを感じるようになった」、「これまでの人生で、ここまで農業と真剣に向き合った経験はない」、「農業といえば農学部と連想しがちだけど、商学部として農業と向き合えることがわかった。今回のような実践的な活動によって、これまで座学で身につけたマーケティングの知識の応用力が身についたので、今振り返ってみると本当にやってよかったと思う」などの声が寄せられました。

このプロジェクトの舞台となった飯田市では、今回の提案を受けて、市内の若い就農者を中心とした新たな農業法人の立ち上げが始まりました。飯田市は、行政として環境整備の役割を担い、法人化のサポートをしていくようです。学生たちの提案が、実現に向けて動き出しています。

VOICE OF STUDENTS



私たちの提案が、日本の未来を変えるかも…。

市のトップである飯田市長に対して提案できたことは、私にとって大きな経験になりました。これからの社会で農業は、さまざまな地域において、その経済的な可能性が見直されてくるでしょう。そうなったときに、私たちが提案した農業ビジネスの有用性が、飯田市から日本中へ発信されれば、より持続性のある社会構築につながると思います。

村尾祐太（商学部 3年）